

後藤靜香選集

第三卷

後藤靜香選集

第三卷

善本社

刊行のことば

一八八四年大分県に生れた著者は、東京高等師範で数学を学び、女子教育に従事すること十三年、使命を感じて退職上京、全国を対象とする社会教育に身を投じ、これに挺身すること五十年、一九六九年八十五歳で東京に没した。

生涯に創刊した月刊誌二一種、その多くは一人で執筆し、その最盛期には購読者百万人をこえ、輪転機で印刷した。著書七〇余冊。

彼は単なる講演者著述家ではなく、常に大衆教育家、文化運動の指導者であった。勤労教育の主張と実践をはじめとし、救ライ、愛盲、老人福祉の先駆者、ローマ字、エスベラント、現代かなづかい等のすぐれた宣伝普及家でもあった。

今その生涯の全著作から、代表的なものをえらび、ここに「後藤静香選集」全十巻を刊行、後世への文化遺産とする。

後藤静香選集 第三巻

哲人の言葉・法悦の心境・自著批判

一九七八年三月十日 初版

著者 後藤 静 香
発行者 山本三四男

企画編集 後藤静香選集刊行会

代表 中山 隆 祐

〒160

東京都新宿区高田馬場一―二三―一二
振替 東京〇―一二二九〇

発行所 株式会社 善本社

〒101

東京都千代田区神田神保町一―六〇
電話 東京 二九四―五三一七
振替 東京 九―一二九五五七
印刷 花山印刷

落丁、乱丁本はおとりかえいたしません

目 次

哲人の言葉

エマースンの言葉	三
哲人エマースン	三
トルストイの言葉	一〇
真の信仰	一〇
ゲーテの言葉	一七
ファウストの片影	二七
バラの雨	二四
パスカルの言葉	三九

省 察 三九

魅 惑 四四

カールライルの言葉 五一

人 生 諸 相 五二

若 き 日 の 彼 五四

若 駒 の ご と く 五七

火 焰 の 洗 礼 六二

価 値 の 無 限 大 六九

永 遠 の 光 明 七二

尊 敬 す る 二 種 の 人 物 七六

不 死 の 靈 鳥 七九

綱島梁川を憶う……………	一三七
懐　　しい人……………	一三七
アウレリアスの言葉……………	一五五
特　　　　典……………	一五五
瞑　　　　想……………	一五九
アウレリアスの言葉……………	一六〇
法悦の心境	
讃　　仰　　の　　心……………	一七一
法　喜　法　悦……………	一五九
絶　　対　　の　　信……………	二〇〇
天地創造への参与……………	二三三

徹底生活の要素……………	三六
靈肉調和の生活……………	二四一
健康十則……………	二六三
完成への道程……………	二七五
さびしさを活かす心……………	二七七
生の展開……………	二八〇
靈的復活……………	二八四
永遠の平和……………	二八五

■ 自 著 批 判

見直した「哲人の言葉」……………	三四三
見直した「法悦の心境」……………	三四〇
「後藤静香選集」第三卷の解説（加藤善徳）……………	三六〇

哲人の言葉

序

哲人の言葉といっても、代表的哲人をあつめたわけでもなく、また哲人という言葉のあてはまらない者もある。ただ、これまで何かに発表したものの中から、類似系統を追うて集めたにすぎない。この書の大部分は、カーライルの名著「衣裳哲学」の片言隻語にたいする感想である。しかし、それも哲学らしいにおいのあるところはなるべくさけ、誰にもわかる方面の言葉を引用しては、それを話題として、言いたいことを言ったものである。何らかの暗示とならば、満足であり光榮である。

昭和五年六月

後藤 静香

エマースンの言葉

哲人エマースン

權威なき予言者よ

彼はある日の日記に、次のごとく記している。

『今日、教会で、言葉というものが、いかに前後の事情もわきまえずに話されるものであるかを知った。止めてしまえ！ 汝、權威を与えられざる予言者よ。……というのは、私には、教壇の下から顔を見上げながら、こうして言葉を聞いている人の事情がよくわかつているからである。心配と不仕合せとが彼らをつつんでいる。そこに靴屋のA君がいる、その人の娘は狂人になってしまった。それで彼は心配そうな顔をして、眼鏡ごしに見上げて、その心配がどうしたら救われるかをきこうとしている。この室に私の友人がいる。その人は自分の生徒たちに見すてられようとしているので、彼はこの次には、いかなる仕事を始めたらよいのかと、途方にくれている。ここにまた、私の妻がいる。彼女はあんなに女の家をたずねて、かえって口ぎたなくのしられたために、ひどく不愉快な気がしたので、なくさめてもらいもし、力も与えてもらおうとて教会に來ている。ここにおうだんに苦しんでいるざんげ者がい

る。ここに先過失敗したB君がいる。そうして彼は私の方を見上げている。おお、されば眞実を語れ。さなくば沈黙せよ!』

事情はちがつても、この心情が各種の修養講演会にのぞむ人の心ではないか。教会にもお寺にもこの種の人々があつまる。——中には、いくどか失敗したので、ただ気なぐさみに大した期待もなく出かける人さえできた。

講師は何を語るべきか。聴衆は、彼が何ほどの学者であり、彼がなにほど多くの書物を読んでいるかを知ろうとしてはいいない。自分の胸にびつたりとくるものを求めている。權威ある声に接しようと待ちかまえている。この人々にたいし、ただ

眞実を語れ! しからずんば沈黙せよ!

この金言を守るべきである。

著書についても同様である。学術や娯樂にかんするものは別として、修養と名のつくものにたいしては、みんな權威ある心の声を求めている。

エマースンが列挙したような人々が、今もこの書物を読んでいる。

何かを与え得ないならば止めよ! おおそうだ。私は沈黙する。

正義は正義を生む

一八五二年の日記に次の一節がある。

『私は植物の法則に信頼するとともに、道德の法則にも信頼する。私はこの七年間というもの、毎夏ともろこしを畑に植えているが、それがかつて馬鈴薯に変わったのを見たことはない。されば私は、正義は正義を生み、不義は不義を生むことを信ずる。』

何たる確信であろう。ともろこしは馬鈴薯に変わらないと同様に、正義から不義は現われず、不義から正義は現われない。このゆえに誰でも安心してよい。

誰がなんと誤解しても、また現在においては何ほどの効果が見えなくとも、正義の種さえまいておけば、必ず正義のみのりを見る。

しかし、この厳肅なる法則にたいして、同時に恐れを抱かねばならぬ。

もしそこに不義の種をまいているならば、後日必ず不義が生れてくる。それを否定しようとするならば、豆をまいて瓜をならせる方法を発見せねばならぬ。世の苦悶は、ことごとくこの無理をあえてしようとするところにある。不幸の種をまきながら幸福の果を求める。まったく無理な注文である。

エマースンの講演

ある日の午後、一人の婦人が、平素よりも早く仕事をやめて帰ろうとしているのを見て、他の婦人がたずねた。

『もうじきにお帰りですか。』

『はい、今日はこれでご免をこうむります。私はエマースン様の講演をききに参るのでございます。』

『あなたはエマースン様のお話がわかりますか。』

『一言もわかりません。けれど私はあそこへ行つて、エマースン様が、だれもかれも皆ご自分のような良い人なのだと思つてゐるようなお顔をなすつて、立つておいでになるのを見るのが好きなんです。』

余韻の多い対話である。講演はわからなくとも講演者その人の心持、その現われを見に行くという。この無学な婦人の言葉にも、哲人のけだかさが見える。

講演そのものよりも、会場にただよう気分が、人の心を動かす。崇高な、そうしてとけあつたような気分のみちた会場、講師と聴衆とが、一人一人結びつけられたような講演でありたい。眞実の言葉には魅力がある。

冷水浴

彼は冷水浴にたいし、いかにも詩人らしく哲人らしい解釈をする。

『このごろ、水というものは、水素がひと、自負心が三の割でできているのだと思うようになった。朝の冷水浴ほど気の大きくなるものはない。さながら窓をあけて眠るような快感をおぼえる。ああ冷水浴よ。それは皮膚の壮美である。二つの極端と極端とが出会うのである。にがい甘さである。あの手おけの水は、苦痛と快楽とを一緒に与えてくれる。』

いかにも味のある言葉である。冷水浴の哲学である。

他人の信仰

エマースンは、他人の信仰を攻撃することを好まなかった。ひくい信仰は、攻撃する必要がない。さらに高い信仰を与えさえすれば、そのひくい信仰はなくなってしまうものだと言信していた。

これは信仰に限ったことでない。人の短所も同様である。それを攻撃するよりも、その人のうちに、高いものを育てて行く。そうすれば自然とその短所が消えて、悪いと思つた性癖さえも、長所になつてくる。

他人のひくい心持を知ったとき、それを責める前に、高い心持を与えることの工夫が必要である。人を統御するにも、学生を教育するにも、友とまじわるにも、この心がけさえあれば、かならずよい結果を見る。

山なす手紙

青年たちが、自分たちの精神状態を訴えて、エマースンの忠言を求める手紙を幾通となくよこした。彼は一々これに返事をした。その手紙を書いた青年が、自分で訪ねて来ることもあった。彼は、次のような手紙を受けることも度々あった。

『闇の中に禁錮されているような心持でいる時、はからずも先生の著書を拝見しました。その本はわれわれをつないでいる鎖を打ち切ってくれました。われわれはただ感謝にたえません。先生、どうぞ今後

お助け下さいませ。』

彼はこんな手紙にもそれぞれ返事をした。

快活

エマースンは一生涯を通じて、天性からいっても、またその主義からいっても快活であった。彼は、家庭において、常に大きい喜びを味わった。彼は国土を愛し、町を愛し、妻を愛し、家族を愛し、また常に自分の運命の幸福であることを喜んでいた。

愛の人は、他を悦ばすことにつとめる。

他を悦ばそうとすれば、どうしても自分が快活になる。どんな悲しい時にも、すぐに自分の足場を定めて、心を動かされないように、次の悦びを発見する。

天性明るい人はもちろん、元来暗い性格の人でも、愛の人になれば自然と明るい感じに変わってくる。

自信

彼の自信におどろく。

『私は、未知の人は聡明で、慈悲ぶかいものと仮定している。もし会って見て、実際にそうであれば、その人に相変らずそうあってもらうようにする。もしその人が、会って見て、自分の仮定している通りでないならば、私はその人を、自分の期待どおりに訓練してやる。』

最後の一句、実に常人の真似えざるところ。しかし、それまでのことができないまでも、いくらか近い気持だけでももって接したい。

働き

彼は精力集中の働きをつづけた。日記の一節にいわく。

『いかなる苛責に対しても、私は唯一つの答たる「再び自分自身の仕事につく」ということより外に何も知らない。「しかし汝は親類をなおざりにするではないか」と言われても「さようです、言われるまでもないことです。それなら私は、もっとはげしく働きましょう」と答える。「しかしお前は天才がないではないか」と言われても、「そうです、それなら私はもっと熱心に働きましょう」と答えるばかりである。「しかしお前は徳がないではないか」と言われても、「そうです、それではもっと精出して働きましょう」と答える。「しかし汝はもう以前の汝のようではない、現代の人々にきらわれるようになった」と言われても、私は「そうです、私はもっと精出して働きましょう」と答えるばかりである。』
実に要領を得たる解答である。働くこと、これ以上の忠も孝も信義もない。われらは「わが道に直進する」この一事を通して、すべての美德を完成する。

トルストイの言葉

真の信仰

トルストイの書いた書物を読んで心にふれた節々や、それについて感じた私の気持など、順序も系統もなく断片的に書いて見る。

○

真の信仰は一つである——生きているすべての者を愛することである。

○

真の信仰は、世界のすべての人々を利するところの、一つの法則を信することである。

○

真の信仰は、静寂と孤独においてのみ、心に入りこむものである。

○

信仰が強ければ強いほど、彼の生涯は堅固である。

信仰なき人生は、獣の生涯である。

○